伝 統 と は ？

中 村 元

ただいま、比較思想学会の峰島会長からご鄭重なご紹介のお言葉をいただきまして恐縮に存しております。皆さま遠路はるばる当地までお越し下さいます。先刻昼休みのお寛ぎの後、地元教育委員会有志の方々のご配慮によりまして、ここでなければ聞けないような隠岐の音頭・踊りを見せていただきまして、すっかりくつろがされていい気持ちになっておられると思います。そのお気持ちを誠につまらぬお話を申し上げてぶち壊してしまうのはなほだ不意なんでしょう、それには訳がございます。

ご承知のように、この度こちらで大会を開くにあたりましては、島後あるいは西郷町の教育委員会・町役場その他諸方面の方々の特別のご懇切なご配慮がございまして実現したことでございますので、それでは、そのお返しに比較思想学会としても何かしてさ

し上げなくてはいけない。どうも適当な案がないから、お前が下手な落語でも聞かせると、そういって私はスケープゴートとして供出されたわけなんです。会の方からのご依頼でありましていやとも言えませんが、じゃあ何かご奉仕いたしましょうとそれだけお答えいたしました。題を知らせろと言われまして、もう咄嗟の間で苦労いたしました。それで「伝統とは？」という題を仮にここへ掲げさせていただいたわけなのでございます。そのわけについては追々申し上げます。

実は私、こちらに近い所で生まれましたんでございますけれど、隠岐島にまいりましたのは初めてでございます。何だ今まで来たことがないのかと、叱られましたけれども。かねがね聞いてはおりましたが、ここへまいりますと、本当に、まあ碧海、淡い波の海が続いております。その彼方に海あり山あり丘あり川あり港あ

りと。縁に周りがおおわれておりましたしてこんな樹木の密生している所も少ないかと思ひます。時候もようございませし。ごちらの方々は心からおもてなし下さいまして本当に何と申しますか、「うったらくる」という名の所へ来たような気がしたのでございませ。仏典に「うったらくる」(Uttarakuru)と申しますのは、北の方にございませ楽土でございませ。どういふ所だつたか、仏典には書いてございませ。仏教美術の浮き彫りにはですな、その有り様を彫つたものが残つておりまして、少なくとも私は一つは見ておりますが。その楽土といひますのは、まさにこういふこの隠岐島のことであるなと、私は思ひ浮かべたのでございませ。

この日本海の中のこの地で申し上げます。これは北辺における一つの学問的なイベント・事件であると思ひますが、どういたしまして東京の方でももう波紋を生じておりますが、皆さまかねてお聞きおよびでございませしょうけれども、日本の荒廢した教育をどうするかというところで臨時教育審議会というのが今総理府に作られておりまして、臨教審と呼んでおりますが。そちらの方からのご依頼は私は逃げまくつていたのでございませ。老人でもございませし、あまりいろいろなことに引っぱり出されたくないものですから。ところがそちらの会長はじめいろいろの方から強いご依頼がありまして、結局、私としてもあまり時間を取られないような、損失の少ない仕方でご協力はいたしませしょうというところで話がついてゐるんですが、ところが、私にち

よつと話してくれといわれまして迷がさないんですね。お前は隠岐島で「伝統とは？」という題で話をするそうだな、というんですね。「えっ、どこからそんなニュースが入つたんですか？」と言つたんですが。そんな、私が隠岐島で悪事をたくらんでいる、悪事千里を走ると申しますが、そのくらい情報網がしつかりしてらっしゃつたら私の話など聞かなくてもよいでしょうと、そう申し上げておいたんですが。

実は、その「伝統とは？」という問題が、今の教育指導者の間で非常なテーマとなつておりまして、隠岐島で話をするならまず自分の所で同じ内容でいいから話せといわれまして。ふと思ひまして、まだ準備は出来ていないがこれは私、隠岐島で話すりハールとしてやってみましようというところで受けたんです。こちらでは決して同じことは申しません。また、こちらへ何つた私としてはいろいろ申し上げたいことがございませすので、しばらくご静聴下さいませようお願ひいたします。

なぜご当地でお世話になるようになったかと申しますと、前に佐渡島で学会を開きましたら非常な盛会でございまして、今度はどこでしようかという話になりまして、たまたま私が隠岐島なども考えられますが、と申しましたら、そうしたら皆さん乗つてこられまして。私がそんなふう口をすべらしましたのは、おそれく心の中の深層心理において親しみをもつてゐるという、そのためかと思うのでございませ。松江へは何十遍も行つていませすけれ

ども隠岐島に來たことがないというので大麥叱られましたけれども、しかし今度は隠岐島で大会を開くとなると、何故松江でやってくれないんだと、松江の方からまた叱られまして、なかなか難しい立場に置かされておりますが。近い所ですから、子供の頃からいろいろと聞いてはおりました。近年になりまして、私、家に伝わっている古文書を、——自分じゃ読めませんけれども東大史料編纂所の所長もなさいましたが桃裕行さんという方、あの方はこちらの奥の出身でございます。——読んでいただきました。したら私の何代前か、祖父のそのまた父だったと思えます。だから曾祖父になると思えます。中村理助と申しますが、それが隠岐島の砲術方を務めていたと書いてございます。これは幕末時代のことでございます。こちらに來て伺いましたら、砲台の跡はないけれども松江藩の陣屋の跡はあるよとおっしゃって下さいました。それから、親戚続きの村上寿夫と申しますが、こう罷を生やした太ったお爺さんでございましたが。その人はこちらの島司をつとめたことがあるとか聞きました。おそらく明治維新以後だと思えますが。太った人でして、私、訪ねて行きましたら留守でございます。松平さんのお屋敷の方に行きましたら、会えまして「あら、しめちよいましたかいな」と言ったのをまだ覚えております。そのお爺さんのあだ名は「しめちよいましたかいな」となりまして、——この地方の方言だったと思えますが。いろいろ思い出がございしますが、そんなことでですね、つい私の深層心理が働か

して口がすべってしまったのかと思うんでございます。

それでは、比較思想学会がなぜここで開くように事を運んできたのか、比較思想学会とはいったいどういうものなんだと、実はこちらの主だった方からご質問を受けました。学会としていろいろ出来ている。この頃は比較法学会というのがございますね。比較教育学会もございます。比較文明学会、これはちょっと範圍が広いです。いろいろ次々と出ているようですが。そういう動きにつれてのものかとおっしゃるんでございますね。それから、学問の難しい話でなしにわかりやすくひと言で言えば、こちらの助役さんがおっしゃったんでございますが、「人の振り見てわが振り直す」という諺がございしますが、そんなことか、と言われました。まさにずばりでございまして、ブラクティカルにはそこに帰着すると思うのでございます。

日本の学問というものは非常に細かに分かれているんですね。自然科学の方で対象がはっきりしているものは、それはいくら細かに分かれてもよいと思うんです。自分とは別に対象がある。それに形式論理学という矛盾律を適用しようような学問でしたらね。AとノンAとは違うんですから分けてよろしい。そうすると無数に分けることが出来ます。ところが人間を扱う学問はですね、これは簡単にAとノンAのダイコトミで分けるわけにはいきなないんです。人間にはパラドクシカルな所もございまして。非常に複雑なものですから、いろいろの面がございまして。それをあまり細か

に分けてしまつて別々の学問を作ると、結局、生きてゐる人間に對する生体解剖みたいなことをすることになつてしまふ。人間そのものを見失ふ。人間の局面を捉えることはできるけれども、人間そのものを見失ふ。この恐れがあるわけでございます。西洋の大学を見ますとですね、西洋だけじゃない東洋の大学もそうですが、人間の生き方の根本をたどるような学問というのは、あるいは人間そのものを扱う学問は「哲学」という名で呼ばれております。広い名前ですが、一つなんです。ところが日本では細かに分かれてしまつてね。分かれてはいるだけじゃないですが、それがセクシヨナリズムのもとになつてゐるんですね。どういふことになるかというと、何か聞きたいと思つて大都會の一等郵便局に行きますと、「あちの窓口へいらっしやい」用が足りないよとまた「こっちの窓口へいらっしやい」と引き回されますね。あれと同じことが学問の方でも起きてゐるわけです。これでいいのかどうか。今日も研究発表の部会で質疑応答がございましたけれども、たとえば、和辻博士の思想が論ぜられてました。一体あの方はどこのカテゴリーに入れたらいいのが、どこの窓口に入れたらいいの。倫理学というところに入れたらよい。けれどですね、和辻博士の倫理学というのは哲学思想の中心を占めてゐる。先生は美とか他の問題も扱われましたけれども、それは人間の問題に從属してゐるような気がするんですね。これは私の受ける印象ですが。けれどもそんなことを言つたら大変です。先生は東京帝国大学という

古風な大学の倫理学の教授でした。それが美学なんてのは倫理学に從属するなんて言つたら内ゲバが起こりましてやられてしまひますから、絶対に言えませぬ。だから読む私たちがですね、行間を読んで察するわけなんです。今のようなり方ですとね、哲学思想の革命的な進展とか変革は起こり得ない。たとえばですね、今世紀における非常に影響の著しい哲學者の一人にウイトゲンシュタインという人がございます。ウイトゲンシュタインの書物「トラクタトゥス・ロギコ・フィロソフィクス」、あの中では彼は非常に獨創的な思想家でしたけれども、「倫理学は成立し得ない」と言つてゐるんですね、はっきり。それから美学についても同じようなことを言つておりました。こんなことは日本の大学では言えないんです。群雄割拠でセクシヨナリズムで固まつてゐるようなところでは。そうすると日本の思想界からはウイトゲンシュタインは出て来ないといふことになるわけです。それでいいのかどうか。

日本はそれ以上にもつと問題をかかえてゐるんです。東と西の思想の交流・対決といふことがあります。つまり外から西洋の思想が入つてきた、それは学問の形をとつてゐると同時に、我々日本人は過去の東洋の思想の影響を受けてゐます。また体系化されていなくても日本人独自の生き方を皆が受けてゐるわけです。その対決をどうするかといふ問題ですね。だからもう細かな窓口をたくさん作つてせめぎあつてゐるようなそんな学問ではとても追ひ

つかないわけですね。これは何とかしなければいけない。根本から考え直して立て直すにはこの比較思想学会が一番良い場面だと思ふんです。比較という手がかりによって根本から考えるわけです。ウィトゲンシュタインの書いたもの、あれはケンブリッジ大学へ出して博士の学位をもらった。そして感心だということでケンブリッジのプロフェッサーに任命されたんですね。日本ではどうですか。あの論文をどこかの大学の文学部へでも出してもらえない。気遣いだと思われませんか。絶対に日本の学界では認めてもらえません。欧米であんなに盛んにもてはやされるものだから、この頃の日本の哲学界でも恐る恐る後についてやっているとということでしょう。こんなことでいいのかどうか。殊に日本がもしも指導的な意味で何かの役割を果たさなければならぬということなら、これは日本人同志がまず自分で考えなければならぬ。自分で考えるためには自由に考える反省の材料、元がなければならぬ。それを提供してくれるのは比較思想学会でございます。

そういうことになりましたとですね、学会というのは必ずしも大衆で開かなくてもいいと思ふんです。自然科学ですと事情は違ひましようけど。人文科学ですと人間を相手にしている学問でしよう。人間を研究して学者が発表するわけですが。大学で発表されるような研究成果というものは、仮りに人間がここにいるとする、それに基づいて学者が料理してうまく整えたものですね。ですから所詮二次的なもの、セカンダリーなものです。けれども

もとのものは生きている人間なんです。ですから生きている人間に直かにぶつかって行かなければならぬ。そのためにはですね、本州の大学でやるのは今申し上げたようにセカンダリーな資料を取り扱っているわけですから、たとえ「大学から出よ」というようなことを言ってもですね、本州の文化というのはだいたい似たようなものでしょう。どこへ行ってもミニ東京ですよ。これは日本の中央集権がきついですから。そうじゃない所にもた別の日本があるんじゃないだろうか。佐渡島で、向こうにお世話下さる人があったものですから、開こうかどうかということで、私は「大いにやって下さい」と、まあ押しかけたんです。確かに向こうで我々は直かに人間に関する知識を得ました。今度、隠岐ですね。私の隠岐に関する知識ははなはだ乏しくて申し訳ないんですが、やはり、隠岐には隠岐独自のものがあるだろう、これを直かに我々が身をぶつけて当たってみるということは意義のあることではないかと、そういう見解で私はサセクションを差し上げたし、学会当局は動かされたと思います。さてこちらへ伺いますとですね、先程申し上げました「うったらくる」の楽園で、果して予想のとおり、人は親切で美しくごちそうも山のようにある。それだけではないですね。これはまた独自のものがあると思ふんです。(歴史については永海一正「隠岐の歴史」松江、今井書店、改訂版昭和六一年七月)

まず昨日は、お宮さんで馬の祭りがございました。私は、ふっ

とインド文明における「馬の祭り」を思い出ししてみたいです。馬の祭り、アシヴァメータと申しますが、これを行うことができるのは特別の大王様であって、一生に一度か二度しか行われぬ。何しろ大規模なお祭りで費用もかかるからですね。ヴェーダの祭りの書物にはそう書いてあるんです。実際その通りだったと思います。昔の西紀前二世紀の王様ですか、プシヤミトラという王様は馬の祭りを復興した。つまり、今迄は行われていなかったのに復興した。そして一生に二度馬の祭りを行ったと記されてあるんです。だから、文献に書いてあることは本当でしょうね。今申し上げたことは碑文にも出てくるんです。馬が尊ばれて神聖なものとして特別の扱いを受けるんです。そこまでは同じです。けれど地球の上と同じ種族が二つあるはずはないんで、必ず違いがございます。

馬の祭りはずね、仏教側から見ると二つ欠点指摘されておられます。一つはですね、不道德だというんですね。牡馬をずっと離しておきまして歩かしておいて、最後に国王の妃がその馬と寝るといふような、そういうような規定があります。これは不道德でありワイセツであるというので、イギリス人の学者セントルマンはその通り訳しております。仏教側ではそれを非難するんです。それが一つ。もう一つはですね、最後にその馬は殺されてしまふんです。これは殺生の罪を犯すからいけないということで仏教の側から非難しております。ジャイナ教はもちろん非難いたし

ます。さてこちら（隠岐）ではやはり尊い馬の伝承があつて、あのお祭りがある。けれどもですね、馬は活発勇壮に駆つておりましたですね。そして後もまた楽しいじゃないですか、別に殺される心配はないから。これはやっぱり隠岐の平和の精神がどこかに生きているんでしょね。そういう違いもございますから。だから馬の祭りということで、まず私は正直、それこそ比較研究のためにも重要な手掛りを与えていただきました。

こちらで大会を開かせていただくということが決まりましたから何うまで何ヶ月かございます。その間にいろいろ話が伝わりまして、いろいろの方が研究文献を送つて下さったのです。隠岐島のガイドとか案内記というものは、これは皆様のお手元にてございます。それから、まだまだ隠岐島の長い深い文化を、研究している方がいろいろございます。私の所へ送つてこられましたので紹介だけ致しておきます。まず、言語学者ですが、服部且という人がございますが、言語学者として有名な服部四郎さんの令息です。この方は、非常に篤学の方でして、東京の方の大妻女子大学で教えていらつしやいますけれども、あのサブディカルという制度が外国にございまして、七年に一度、一年間は休めるはずですよ。そういう時、たいいてい学者は外国へ行くんです。ところが服部且さんは外国へ行かないで島根県への留学を申し出られたのです。何をされたかといいますと、島根大学などを足場にされまして、

風土記というのがございますね、出雲風土記。あれを克明に實際に現地の実状と対照されて論文をいくつも書いておられるんです。風土記を検討するのに足で歩いている。まあ足で歩いて論文を書くというのは、お父さんの服部四郎さんもそういう傾向がはっきりしておられますが。どうかすると学者というものは書物だけ読んで机の上で結論を出す。それじゃあいけない。自分の足で歩いて調査してみるということ。そして服部且氏はついにいくつも論文を出しておられますが、隠岐に関するものとしては、こういう論文を書かれました。「出雲国風土記島根郡家の比定——瀬埼城の比定と古道の『復元』を手がかりとして」という論文です。(『大妻女子大学文学部紀要』第19号、昭和六二年三月、四五—八四ページ)

瀬埼という所があるんでございましょう。その比定、アイデントリーフィケーションです。そして昔の道を復元する。それはその出雲の海岸に防人がいたというんです。つまり、昔の自衛隊です。それがどういう性格のものであったかということが分からないし、学者もよく知らない。けれど服部且さんは克明に研究されましたですね、これは北からの侵入を防ぐための軍隊が駐屯していたんだ。北からというのは隠岐国からだということですね。そうすると奈良時代ですか、もっと古い時代に隠岐国は相当に高い文化と強い力を持っていた。だから本土の人が恐れをなしていたというんですね。それが結論です。もしご興味のある方にはご覧に入れます。その時代にすでに隠岐国は一種の独立国だったとい

うわけですね。

それから、いろいろな方から送っていただいたのですが、中沼郁さんという方ですか、こちらにご縁のある方ですが、特にご先祖が隠岐国にたいへん尽くされたんですね。そして隠岐騒動と俗に言われているもの、その本質を究められたんです。私にはよくわかりませんが、隠岐騒動で隠岐コミュニケーションというものが作られたのは明治四年ですね。明治の時代に中央の政權に反抗した事件が二つあるのです。世間では幸徳秋水の大逆事件は有名であります。幸徳秋水がジャーナリストだったし思想を持っていた人でもあったし、余計取り上げるんでしょうけれども。しかし幸徳秋水自身は何もしなかったんですね。どこかで彼の親しい人が爆弾を作りかけていたとかいうのでしょう。その程度で何も起こさなかった。ところが実際に反抗の行動を起こした場合が二つある。一つは秩父、埼玉県の秩父の困民党事件ですね。困民党事件というのは、私は専門は違いますし、つつくつもりはないんですけども、これは相当重要視すべきだと思っただけです。多くの人は、ただあそこで土地の人たちが暴動を起こしたと、そういう具合に伝えている。けれどそれ以上の意識があったのです。あの時ですね、暴動を起こした人々は日本共和国元年と称しているんですね。これは大変なことだと思っただけです。つまり、明治の絶対王制がほぼ固まりつつあった時代に日本共和国元年とはっきり書いたというんですから。これは警察力によって当然鎮圧されました。こ

れはかなり知られております。もう一つはね、この隠岐島の隠岐コミュニティだということですね。ここにいろいろ中沼郁さんが書かれた書物がございます。それからそれに感化のあった中沼了三さんという人の書簡集『藤田新編「中沼了三書翰集」著者私家本、昭和六十一年』、それから新聞の切り抜きですね。それから五木寛之さんという作家、あの方が隠岐島をずっと廻ってテレビで放送しておられましたですね。それについて、テレビではどうしても興味本意になります。視覚に訴えるように、けれども多少突っ込んだことを書いておられる。「歴史の闇に消えた隠岐騒動」という題で、これは確か「新潮45」とかいう雑誌がございますね、あれは何と読むのか知りませんが、あれは歴史的な記録を集める雑誌だそうですね。新潮社で出している雑誌の中では一番売れない雑誌だそうですね。そのようにそちらの編集の方が言っておられました。しかし歴史を研究する人にとっては非常に大事な資料です。隠岐騒動と、それから五木寛之さんが「東京日刊現代」に連載しておられます。それから中沼さんの詳しい手紙もここにございます。いちいちご紹介するのは時間がございませんから、島根大学の内藤正中さんという方が「祖先の間の動き」というので書いておられます。(内藤正中・藤田新・中沼郁著『隠岐国維新史——隠岐騒動の再評価——』松江、山陰中央新報社、昭和六十一年)

簡単だけに要点をうまくつけていて面白いと思っただのは半沢弘さんですね。この方は何と申しますかね、もうお聞きおよびの方

もいらっしゃると思いますが、半沢さんは反骨の思想家と申しましょか、そういう方でいらっしゃいます。思想の科学研究会の会員の方です。この方が読売新聞に昭和四十六年に書かれた。私はその年時を覚えていませんけれども抜刷を送っていたたくと非常に面白いんです。要点だけを申しますと、まず自分は境港から船に乗って出かけた。その船の中で年とった老女が朗々と漢詩を吟じていたというんですね。これはちょっと本土では見られない光景でエツと思つたというんですね。それからここへ来ると、ヘッディングにはこう書いてあります。「女の文化が脈うつ島」というんですね。つまり女性上位の島だということです。本当なんですか。「隠岐島には女の文化・女の力・女の優しさというものが存在するらしい。と同時に、日本の老女のこのようなけなげな姿に直面してうれしくならずにはおれない。」

ところで隠岐騒動とは何かという、これは明治元年から始まつたらしいですが、それまでは松江藩の役人がここに駐屯していたわけですね。ところが松江藩の代官以下役人兵士を島から追い出したという事件だということです。そしてその時にはこの神官さん・お百姓さんの間の知識人、そういう人七三人が連署して文武官の設置の許可を嘆願した。ところが松江藩はこれは「ならん」と言つたんです。なぜかという、一般の民衆に文化の知識だとか武勇だとか教えると、いまに彼らが何をするかわからんから文武官設立まかりならんと言つたんです。そこでですね、この

土地の人は大變怒ったんです。そして、総指揮官はですね、あの水若酢神社の宮司さんだそうです。明治元年に約三千人の農民がですね、お代官様の屋敷に迫ってますね、「従来の國政というものは私の取り扱い多く」どうもえこひいきが多いと、「庶民一統帰服いたさず」どうも納得がいかないと。そう言って弾劾書をつきつけて、そうして島から立ち去れと。ところがまだ明治元年なら身分の制度が残っています。さあというんで、けれど民衆が皆団結して迫ってきたもんだから、これは大變だと思って、それでお役人は逃げて行ったというんですね。ところで逃げて行く時に世界史においては見られない独特のことがらがある。それは何かと言うとですね、松江へ退去して行く代官一行の船に、その糧食用として白米二俵とそれから清酒二斗入一樽をおくったというんですよ。こんな優しい革命というのが世界の歴史にあったかどうか。それで一人も殺さなかったわけなんです。役人をも殺さなかったし、また役人もこっちの農民を殺さなかったわけです。後に処分はされましたけれども、死刑とかそういうことは一切なかったというんですね。「島方の者も今後は暴発を固く慎み……」と書いてございます。非暴力抵抗なんです。これはガンジーが目ざしたアヒンサーと同じことなんです。と同時に、あるいはガンジーのアヒンサー以上の意味があるんじゃないかと思うんです。ガンジーのアヒンサーの運動がなぜ成功したかという、それはガンジーが偉かったことは事実です。民衆が大勢ついてきたとい

う事も事実です。けれど今迄はわずか二〇万のイギリス兵に抑えられていたんでしょう。ところがイギリスがさあつと逃げたというのですね、あれは日本軍がシンガポールの沖でレパルズとプリンス・オブ・ウェールズでしたか、何か大きな戦艦をやっつけたね。あれで制海権を取られてしまった。これはもうこんな所で勢力を削ぐのは馬鹿だと思って、それでイギリス人は賢いからさあつと手を引いたんです。あれがガンジーのアヒンサーの運動の一つの面を示しております。むろんガンジーが「武器を持って」などと言ったら、またゴタゴタ起きたでしょうけれども。ガンジーはそういうことはさせなかった。隠岐島の興味ある人は隠岐コミューンだと言うんだそうです。パリ・コミューンに対比させましてね。一人も流血の惨事がなかったという。これは島に残っている優しいさの心情というものが影響したのじゃないか。「優しい革命隠岐騒動」と半沢さんは大きく書いています。明治の歴史というの、結局明治政府を乗っ取った薩長の立場で書かれているが、けれども薩長以外の立場も考慮しなければいかんというのが、この半沢さんの主張なのです。その立場から見ますと、隠岐における一群の農民が立ち上がったということは、日本の歴史でも注目すべき事実ではないですか。百姓一揆というのは徳川時代にも何百回起きたか。殊に時代が下る程一揆の数は多くなっています。そして終末は主人は礎ですわね。ところが全然違う性格の一種の社会改革運動があった。松江の封建領主がこへ干渉すること

もなくなったというんですね。私、いままで勉強足りなかったんですが、こういうことを読みまして非常に感激しました。隠岐の国の方はご存知なんでしょうけれども、外からいらっしやった方は、あるいは私と同じようにご存知ないかも知れない。そんならここで申し上げておいた方がいんじゃないかと思つて持つてきましたから、もしご興味のある方はご覧に入れますから、どうぞご覧になって下さいませ。

こう思うとですね、隠岐には隠岐独特の文化があるわけです。

他の島にもまた何かございましょう。そういうものが全部集まつた所に日本が出来ているわけです。何も東京と大阪だけが日本全体を代表しているわけではございません。こう思いますと、伝統を重んずるといふことはですね、日本にとつては非常に大事なことではないか。では外国ではどうかということになりますと、何から申し上げますか、日本とドイツとはですね、非常に似ている点がございますので、よく対比されます。これは明らかに違うわけで、日本は島国でもう神代の時代から一つの単位を構成していたようです。ところがドイツなんかはどこからどこまでがドイツだかわかりませんよ。しょっちゅうシュトラスブルクとかアーヘンのあたりはこちが取つたりあちが取つたりやっているわけでしょう。それからオーストリーとの間だつて分かれたり一緒になつたりして、ポーランドの間だつてしょっちゅうあち行つたりこち行つたりでしょう。だから地域的には國の概念がはつき

りしない、実質的にはつきりしない。インドだつてそうですよ。いったいインドというのはどこからどこまで言うんだか。お隣りにはパキスタンという大きな國があるでしょう。パキスタンはついで十数年前まではバングラディシュの方と両方で一つの國だつたでしょう。それから今二つの國に分かれていましょう。國の概念が全然違うわけです。ネパールとインドは今別の國です。けれども昔の本を見るとネパールもインドもずっと続いていたわけです。だから、お釈迦様はネパールで誕生されましたけれども、インド人だと言つてもかまわない面があるわけです。

ところが日本は全然違う、海に囲まれている。それが非常に生活が安定していて安寧を保つてきた。島の中で異なつた民族が殺し合いをしたという歴史がないわけです。殊に平安時代三五〇年程の間は死刑が一度も行われなかつたなんて、まるで夢のような理想郷だつたわけです。こういう平安な國であります。だから平安の都というわけです。けれども、島で統一が出来ているものだから中央の権力が非常に強すぎる。だから地方の伝統を軽んずる傾向があると思います。ドイツですと、さつき申しかけましたが、地方によつて文化の色調が違いますね。あれはブンドスレプブリーク(連邦)です。いろいろの國が集まつて一つのブントを作っているわけです。だから、北のドイツと南のドイツじゃ建物の色合いも違いますし、それからドイツ語の発音なんかも随分違いますね。気性も違います。ところが日本は一つで統一され

ている。その証拠として一つ思い出しますが、今朝の学会でもハイデッカーという名前が出ました。ハイデッカーの弟子です。アメリカのスタンフォード大学の先生になっているドイツ人でラインハルトという方がおられました。その方に私は戦後間もない頃スタンフォード大学でよく会いました。よく伺ったんですが、「先生はいつかベルリンにいらっしやいましたか」と言ったら、「わしゃベルリンなんて行ったことはないよ」と答えるんです。日本です。地方の大学の教授で、「わしゃ東京なんてあんなきたらしい所へ行ったことがないよ」と威張って言う人がいるでしょうか。また実際行ったことのない人がいるでしょうか。ところが南ドイツの人はですね、文化は南ドイツに伝わっているという絶大のプライドを持っているわけです。だからあんな北の方のプロイセンの成り上がりのベルリンなんか、わしゃ行かんと言うんです。こういうプライドを持っているんですね。だからドイツの文化は多様性を残している。

ところが日本は何か中央で統制されてですね、統制されること事態は悪くはないんだけど、地方に残っているいいものでも消し去られている恐れはないかどうか。殊に中央の官庁でやっていますこの頃の文化政策を見るとですね。あれは文化を保護するのじゃなくて文化を破壊してるんじゃないかと、わざわざ破壊するのが目的じゃないかと思うことさえもよくございます。殊に漢字の使い方なんかですね、もともと使われなかったような使い方

を学校で強制してその通り書かなければバツだと言うんですからね。あれは文部省のやっていることは無茶だと思えますね。こういう文化破壊が行われている。これに対して我々は何か考えなければいけないと思うんですね。それから、アメリカは新しい国で伝統の力は強くない。けれども、だいたい統一されている国ですが、伝統に対する顧慮というものは非常に強いです。殊に、アメリカ文明の発祥地でありますニューイングランドの方の海岸地方に行きますとですね、独立戦争以前の古い家が海岸にあるわけです。そこに数字で千七百いくつと書いてあるんですね。これは千七百何年にこの建物が建ちましたという印なんです。それは貴重な文化財で、しかもそこに人がなお住んでいるわけですけれども、それを損なわない。そこに住むことを誇りに思っている。こういう所が現在でもございます。

これからの文明の動きというのを見ますと、これは明らかにグローバルに、全ては世界的に地球の上で地球を一つの単位としてだんだん事が運ぶようになってくる。これは当然のことであり避けられない行方であると思いますが、ただその場合には、一つの文化のあり方でもって他の文化を抹殺するというのがあってはならない。それぞれの文化の伝統に意義を認めるという、それによって多様性に富んだ豊かな文明を築きたいものであります。釈尊が最後の旅路に出られる時に、説法された。その時ヴァッジア人というのは共和政治を行っていたのですが、お弟子を通じて王

様にこういうことを伝えたというんですね。「ヴァージ人が未来の世にもいまだ定められていないことを定めず、既に定めたことを破らず、往昔に定められたヴァージ人の旧来の法に従って行動する間はヴァージ人には繁栄が期待され衰亡はないであろう」と昔からの伝統で良いものであれば、これは残すべきであると。ただその場合に何もかも古いものであれば残すというのであってはいけません。これは時代の進展に應じて自らそこに批判がなければならぬ。仏典の非常に古い書物ですが『スッタニパータ』という書物の中にこういう教えがございまして、「古いものを喜んではならない。また新しいものに魅惑されてはならない」老人はどうかすると昔はよかつたなと思いたがる。それから、若い人は何でも新しければこれはいいや、チャーミングだというところへとんでいく。これはどちらも極端であると。それから「亡びゆくものを悲しんではならない」亡びるものが亡びるのはこれは運命なんですから、悲しんではならない。牽引するもの、これは人間の内に潜んでいる妄執ですが、それにとらわれてはならない。じつと心の目を開いて、これは今後ますます発展されるべきである。それから、これはこの際改めるべきであるという、そういう明らかな知慧の眼を持って批判すべきであると。こういうことが説かれているのでございます。これは今から二千五百年前に説かれた教えてございますけれども、しかし今後文明を進展させるためには、これは当然の顧慮でございましょう。未来というものはただ

放っておいて来るものではない。今ここに生きていらっしゃる方の中から現われ出るものである。今いらっしゃる皆さまが創られるものです。ですから、根本から考えていただいで、今後の文明の進路を見究めて進んでいただきたい。これが私のねがいでございます。

本日は皆さまお忙しい中お出で下さりまして、ご静聴下さいましてありがとうございます。

〔付記〕

比較思想学会のこの公開講演で、「伝統」の問題について講演し、それが政府の臨時教育審議会で取り上げられたことは、上述の通りであるが、その審議会での哲学的基礎を扱う「科学技術文明に関する研究会」から依頼を受けて、座長であるわたしが提出した意見書は「伝統」の問題と関連があるので、ここに併せて掲載させて頂くことにする。(岡本道雄臨臨教審会長がわたくしに特に論究することを希望されたのは「伝統」の問題であった。)

教育改革に関する意見書

I 伝統の反省

中村 元

伝統は西洋の tradition の訳語である。仏教では「伝燈」とい

う語を多く用い、インド文化圏では parampara (順次につづく) という語を用いる。

われわれにとって問題となるのは、

1 日本人の伝統とは何か？

2 伝統に対してどう対処すべきか？

滅びるがままに滅ぼしてしまつてよいのか？ あるいは保存に努めるべきか？ ということである。

1の問題について、われわれが日本独自の伝統と思ひなしていることも、実は外国に類例がいくらかもある。日の神の信仰も、天皇崇拜も、武士道も、切腹も、封建制度も、みな外国に見出される。仏教や儒教は外国から入つて来たものであるから、外国に類例のあるのは当り前であるが、民族宗教と思われる神道もその行事・信仰の類例をいくらかでも外国に見出し得る。加藤玄智「神道の宗教發達史的研究」という大著を一冊手にしただけでも充分に立証し得る。われわれとしては、外国の似た類例をわが国のそれと対比検討することによって、そこで始めて日本独特のものを見出し得るのであらう。

2 伝統に対していかなる立場をとるべきであるか？ 「古いもの喜んでほならない。また新しいものに魅惑されてはならない」(Suttanipata 944) というのは永遠の真理であらう。われわれは、先人の築いた伝統にもついで今日のわれわれの文明が成立したのであるから、伝統は充分に尊敬されるべきである。伝統の

新しいアメリカにおいても、ニュー・イングランド以来の伝統や遺品を尊重し、南部諸州は Confederacy 以来の共同の運命を追憶してゐる。

しかし近代機械文明の進展は、文明の進展の妨げとなるものを急速に破壊しつつある。特に世界が一つになる傾向があるために、諸文明は均質化しつつある。

そこで古来の伝統に対しては、唯だ知識の対象として対処するだけではなくて、選択が必要になる。

伝統は脆くて、滅び易いものである。『リグ・ヴェーダ』の詩を生んだ北部パキスタン、巨大なピラミッドをつくつた古代エジプトは現在のパキスタンやエジプトとは文化的には無縁である。

一三世紀のカンボージアは、仏教の慈悲の精神にもついで、貧困者・病人に対する救済施設では世界じゅうで最も進歩した国であったが、近年では大虐殺が行われた。伝統が死滅したのである。平安時代三百年のあいだ日本では一度も死刑が行われなかったのに、その後の日本はどうなつたであらうか？ ヨーロッパでも Meister が死ぬとその技術が途絶えた例がいろいろ見られる。残すべきものは充分に注意して保存し、適当に生かさなければならぬ。

この点で明治維新以後の日本は、近代化に急であつたあまり、何もかも失つてしまつたような傾きが見られる。インドは、イギリスの植民地であつたにも拘らず、世界の精神文明の根源として

の恐るべき誇りをもってゐるし、中華人民共和国は共産主義になつても残すべき習俗や技術は残している。

この点で日本の指導者は余りにも自信が無き過ぎた。殊に近年の第二次世界大戦における敗戦ということは、日本の歴史に初めての経験であつたために、衝撃も大きく、「昔からのものはみな捨てしまへ」ということになり、批判的な選別がなされなかつた。そうして進駐軍の命令するがままになり、今日になつても改められていない。

これを西ドイツと比べてみると、非常に大きな相違が見られる。彼らは敗戦に慣れているから、「今度も敗けた」というくらいにしか受け取っていない。彼らは、哲学、学術、音楽などでは戦勝国より勝つてゐるといふ強い自信をもつてゐる。だから必ずしも進駐軍のいうとおりにならなかつた。

殊に惜しむべきは、日本の行政が積極的に日本の伝統の破壊を行つたことである。これは或る意味で明治以後の政府の方針が、敗戦によつて拍車をかけられた趣きがある。政府主導型の文化破壊はまず改められるべきである。

日本民族は東アジアの離れた小島に鎖されて周囲から隔離されて生活して来たので、運命の共同から免れることはできない。経済的には成功したが、精神面では自信を失つてゐる。これが教育の面にも反映してゐるはずである。

しかし今後地球の表面全体が一つのまとまつた単位として進ん

で行かねばならぬのであるから、日本の進路というものは単に日本人にとつての大問題であるにとどまらず、今後の地球社会の進路にも大きな示唆を与えらるゝと、平和の実現に重要な貢献をなすであらう。

II 宗教の精神を生かす

いま教育の荒廃ということが盛んに論ぜられてゐるが、例えばいじめとか登校拒否とかいう問題は、公立学校でだけ起こつてゐることである。反対に宗教教育を行つてゐる学校では起こつてゐない。仏教精神で教育を行つてゐる学校では、この問題は起こつてゐない。キリスト教関係の学校でもついぞ聞いたことがない。神道色の強いところは、概して保守的であるから、当然こういう問題は起こらない。またいずれか一つの宗教に偏るのではなくて、機会あるごとにいろいろな宗教の講話を聞かせてゐる学園でもこの問題は起きてゐない。

さらに日本に近い隣国の場合はどうかと思つて韓国や台湾の人人に聞いてみると、「それは何のことですか？」と反問する。儒教や仏教の伝統の強いこれらの国々では、いじめや登校拒否は起こつてゐないのである。

戦前の日本を考へてみても、いじめとか登校拒否という語は存在しなかつた。これらは戦後に顕著になつた現象なのである。ではどうして日本の公立学校でだけこういう事件が起こるの

か？

そのわけは、公立学校では、宗教と教育とは分離されるべきであるとの理由によって公教育の場から宗教を追放したからである。

その法的な根拠は日本国憲法である。その憲法の原文はGHQから日本政府に交付されたもので、英語で書かれていた。それが日本語に翻訳されて、議会で審議された。日本の議会で審議されて通過した文面が、また英語に翻訳されて発表された。GHQから手交された英文と、日本議會を通過した憲法本文の英訳文とを比較してみると、宗教に関係ある条項に関する限り、両者は全然同文である。(僅かに religious activity と単数で表現されていた語が religious activities と複数に変わっただけである)その両方の英文草稿を見ると religion (宗教) という語は一度も出て来ない。ただ religious activity というふうに religious という形容詞が出て来るだけである。

日本語では「宗教的活動を公教育において強制してはならぬ」と解されている。

しかし「宗教」という語は、はなはだ曖昧である。日本語でいえば、ただ「宗教」という一語であるが、英語では「ア・レリジョン」(単数形)、「レリジョンズ」(複数形)、「ザ・レリジョン」(その宗教)とただの「レリジョン」(定冠詞も語尾もつけない形)とは、意味がちがう。最後のものは、個々の宗教教団の組織

や教義を離れた、諸宗教に通ずる普遍的・本質的なもの、あるいは全体的なものを意味する。

そこで、憲法とか、あるいは教育に関連する諸種の法律で禁ぜられていることは、個別的な教団の教義や活動を強制してはならぬということであって、諸宗教の根本にある本質的普遍的なものを禁止しているわけではない。

「宗教」というのは、明治の先覚者がレリジョンという西洋の語を翻訳するにあたって、充てた訳語であるが、「宗教」というものはもともと仏教の語である。ただし仏教の用法では「宗」と「教」とは意味を異にする。「宗」というのは、人間の活動の根本にある理法であって、言語表現を超えている普遍的なものである。それを人々に対して説くときには、言語にたよらねばならぬし、相手に応じて異なって来る。それが「教」である。そこで両者を合せて、仏典では「宗教」という。

そういう考え方に立つと、個別的な諸宗教の教義や儀礼を強制はしないが、しかし基本にあるものは尊ぶということになる。

レリジョンに相当する語は南アジアの諸言語のうちには存在しない。そこでダルマを以てレリジョンの訳語としている。例えばキリスト教のことをクリステイ・ダルマという。この考えによると、ダルマには、現象的な側面と本質的基本的な側面があることになる。

基本的本質的な方面を尊重するという立場に立つと、西ドイツ

の憲法のように「宗教を尊重せよ」ということになる。スリランカの憲法ではグルマ(宗教)を、インドネシアの憲法ではアーガム(宗教)を、パキスタンの憲法では、ディーン(宗教)を重んぜよ、ということを読くのである。

こういう道理を尊重するならば、おのずから新しい時代に合う宗教心というものが養われるのではなからうか。

それをどう実行するか、ということになると、いろいろ施策を考えねばならぬであるが、若干のアメリカ人に言わせると、日本の教育における宗教の扱い方は、余りに極端に馳せている。G H Qのディレクティブを妙にゆがめて実行している——と。

アメリカの実状はかなり異なる。有名な大学には私立大学が多いが、大学の校庭の真ん中にチャペルが建てられている。それが精神的な拠り所となっている。そこで日ごとに宗教的な儀式が行われる。普通はキリスト教の牧師が来てお勤めや説教をするが、或る場合には異人種である日本人の仏教僧を呼んで行うことになっている。

アメリカの州立大学は公立であるから、政教分離の原則が立て前となっているが、しかし宗教そのものは重んぜられている。例えば或る州立大学では「宗教週間」を設けて、アメリカの主要宗教の活動を示し、宗教音楽や宗教演劇を催すのみならず、仏教の講演や展示会までも行う。

アジアの例をとると、スリランカの中学校・高等学校では宗教

教育は強制的であるが、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教(旧教と新教)のいずれのコースをとるか自由になされ得る。インドでは、公立学校では特に宗教教育を行わないが、古典教育の時間に宗教的な心情を養うことにしている。他方私立学校では宗教教育を大っぴらに行っている。

こういうふうな国によって事情は異なるので、日本の進むべき道は日本人自身が決定せねばならないが、過去の人類の歴史を見るに、人間性のうちの高貴なものはいずれかの宗教(単数または複数)によって養われた点が多いから、教育の面でも宗教の尊重という方針はもっと生かされるべきであらう。

それは目に見えないものに対する尊敬の念であり、人間の本源に対する自覚である。

III 大学における研究教育の主体性の回復

現在臨時教育審議会における諸方面の方々の御尽力によって、教育制度は今後段々と良い方向に向うであらうが、率直に言って乱塾の問題は解決できないと思う。

現在青少年の学力は、塾によって養成されている。学校では何もして貰えない、と、子供たちは不平を言う。学校から帰ってから塾へ行き、夜遅くなってから帰るといのは、子供たちにとって非常に大きな負担であり、気の毒だと思われるが、子どもたちは嬉々として塾へ行き、塾の生活を楽しんでゐる。学校が、学力

をつけてくれないのみならず、訓育もしてくれないから、巨大な学校組織を維持することは、莫大な税金の浪費である。

学校が面白くなかったのは、教師にのしかかる繁雑な事務、教師の側に「国のため」「地縁共同体のため」という意識の欠乏などいろいろな理由が数えられるが、乱塾の現象には他の理由が考えられる。なぜ塾へ行くか、というと、良い学校に入りたいため、である。良い学校とは何かというと、良い上級学校に入れる学校のことである。結局は特定の良い大学への道が開けているところをめざす。特定の良い大学へ入りたい、というのは、そこで勉強したいから、というのではなくて、社会へ出るための良いパスポートをもらいたいからである。パスポートを手に入れる見込があれば、勉強はしなくてもよい、という実情になっている。

これは真実に学問を求める態度ではない。しかし大学にメスを入れない限り乱塾の問題は解決しない。

〈大学〉とは、昔は学問と教育の最高学府であるとされてきたが、今日では変質して来たようである。今でも真摯に勉強している学生のいることは事実であるが、どうかすると大学は遊園地と化し、いわゆるアルバイトを本業としている学生たちが時たま顔出しする集会所にすぎないという場合も珍しくない。

大学が巨大になると、行政組織が複雑化するために、全体の調整に非常な努力が費消される。教授会ではビジネスに関する論議ばかりで、学問そのものに関する論議はなされない。諸教授は会

議から会議へと追われている。これは、学問に傾倒する者として本末転倒である。こういう実情においては、研究と教育における主体性の回復が望ましい。

そのためには根本的な改革を必要とする。まず現在のマンモス大学を全部解体して、従来の大学は単なる「大学会館」にしてしまえばよいと思う。大学教授はその会館の一部を借りて、めいめいセミナー（または塾）の中心的存在として講義や指導を行うのである。それによって教授は研究や教育の主体性を確保することができるし、学生は自分の信頼する指導者を自由に選択することができる。ちょうどアメリカの開業医や弁護士に似たような存在になる。アメリカでは開業医が手術を行う場合には病院の施設の一部を借りるのであり、主体性は医師のほうにある。

いまのわが国の現状では、大学（つまり建物敷地プラス資金プラス設備）が研究や教育の主体であり、教師はそこで用いられている道具にすぎず、学生はその道具に供せられる材料にすぎない。組織が教育する立て前になっているが、それは本末転倒である。その立場は唯物論である。本来は人間が人間を教育するのではなくればならぬ。

学生は主体性をもって学ぶのでなければならぬ。具体的にいうと、大学教育を受けようとする青年は、たとえば自から進んで甲という教授のもとに就学し、その指導を受ける。選択はその青年の自由である。

甲教授はその青年学徒に、たとえば国史ならA大学会館のB教授の講義を聞くように倫理学ならC大学会館のD教授の講義を聞いて単位を修得するように、というふうに指導する。そうして一定数の単位を修得したならば、甲教授が学位を認定し、証明するのである。ドイツやオランダの学位授与の形式を見ると、学位は個々の教授の権威のもとに与えられるのであり、大学の権威のもとではない。それは、診断書は個々の医師の責任において書くのであって、病院が書くのではないのと同じである。

その際に当事者が勝手なことをしてはいけないから、国家の定める一定の基準に従い監督に服する必要があるであろう。国家試験を課するのも結構である。

教授個人が主体ということになると、若干の特定の教授のもとに学生が殺倒するのではないか、というおそれが考えられるが、それこそ学問を中心にしての競争であるから、こういう競争はむしろ歓迎すべきではなからうか。そうすれば、学生がいよいよやながらあくびしながら講義を聞くことは無くなる。

教授が主体となって教育を行う場合に、理想を共にする(同一地域または異なった地域の)若干の教授が共同することは望ましい。同じ大学会館、または異なった大学会館にわたって学問共同体が成立するのも歓迎すべきである。建物敷地や資金や設備が中心となるのではなくて、学問を追求する「精神」が主体となるのでなければならぬ。

ヨーロッパでは大学生は渡り鳥のようにあちこちの大学で単位を修得し、その際には大学間の障壁が無いのみならず、国と国との差別さえも無視される。アメリカ、カナダの主要大学の間でも単位の相互認定がなされていて、一つの大学に釘づけにされることが無い。

この精神は古来東洋にも生きていた。昔の禅僧は諸方の僧堂を遍歴して明師の指導を求めていた。「行雲流水」のごとく住処に固執することが無いから、禅僧のことを「雲水」という。僧は南アジア一般に「四方の人」と呼ばれるなかまであり、四方をめぐって修学した。

ところがこういう求道の、態度が失われて、ただレッテル追求とセクシヨナリズムだけが残ったのである。こういうふうな伝統的な崇高な風格を失わせたのは、明治以後の行政である。

さて以上に提言したようなしかたになると、「何々大学卒業」という肩書はなくなる。レッテル商標授与所としての大学の機能はなくなり、東洋に伝統的な個人指導の「塾」の精神が生かされることになる。

このようにするならば、
① 特定の大学に入りたいという入試地獄というものはなくなってしまう。

② 従って受験浪人という現象は消失する。

③ 学閥は消失する。(学問的理想の共同の故に、新たに仲間が

形成されるかもしれないが、それはむしろ歓迎すべきである。)

④ 学園紛争というものは無くなる。

⑤ 教師と学生との間の人間関係は密接になり、指導も懇切となる。

⑥ 学生の側では、就学の権利と聴講の自由を確保することになる。聞きたくない教師の講義は聞かないでもすむことになる。

研究に關していうならば、学部の上に大学院をのせるという構造は廃止されねばならぬ。学部とは無関係に諸方のすぐれた研究所での講義や演習が学位取得のための単位となるのでなければならぬ。これはアメリカやインドでは大規模に行われていることである。

また博士や修士の課程での単位は、社会人がいつでも、時期を限定せずに参加取得できるものでなければならぬ。学問は一生の仕事であり、年数を限るべきではない。研究の何たるかを知らぬ人々がこんなおかしな制度をつくったのだと思うと、嘆かわしくなる。

さて、現存諸大学を廃止して大学会館にしてしまおうということになると、当然のことながら、国立と私立との区別はなくなる。つまり、国立大学を全部廃止するわけである。

日本の興隆期には国立大学も必要であり、その存在意義もあった。「国立」ということに関係者は誇りと義務感をもっていた。ところが今日のように「国のため」ということを知識人たちが考

えなくなつた時代に官公立は無意味である。行政による繁瑣な、ときには外国人から見た噴飯物である法的事務的規制が無くなるだけでも、学術に対する大きな貢献である。「国のため」を思う人々は、その仲間ですなわち統合同体をつくれればよい。

大学の改革はまだ以上のことだけでは尽きない。細分化された専門の間の統合が必要である。矛盾律の適用される領域の学問、例えば自然科学の場合には、いくら細分化してもよいであろう。しかし人間そのものを研究する分野では、矛盾律が必ずしも適合されない。そこで諸分野の研究の統合がなされねばならぬ。

大学の原語 *university* は、ラテン語で「諸の学問を」(一)(*unus*)に向ける (*versus*)、すなわち統合するところである。これは、まさに弘法大師空海のつくつた綜芸種智院〔すなわち諸の学問を総合して智識を種(う)えるところ〕の理想に対応する。弘法大師が庶民のために京都九条にこの普通教育機関を設立したのは天長五年(八二八年)であり、ヨーロッパで十二世紀に大学が設立されたのよりも遙かに早い。ところが明治以後の行政や学者たちは、この総合の理想を忘れてしまった。かくして人間の学問が枝葉末節の追究に墮して、セクシヨナリズムばかりはびこることになってしまったのである。失われた精神の回復ということは、今後の学問の発展のために是非必要なことである。

(なかむら・はじめ、インド哲学・仏教学、

比較思想学会名誉会長)